

東アジア圏の複言語主義共同体の構築

—多言語社会香港からの示唆—

(課題番号:15H03221)

平成27年～平成29年度 科学研究費補助金

基盤研究(B)(一般) 研究成果報告書



平成 30 年 3 月

研究代表者 河合 靖

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授

Research Faculty of Media and Communication

Hokkaido University



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

まえがき

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
河合 靖

多層言語環境という言葉は、この研究プロジェクトを進めるにあたって用いることにした、他ではあまり馴染みのない用語である。多言語環境とどう違うのか。通常、多言語話者というと1人で複数言語を話す人を言い、多言語社会と言うと複数の言語グループが存在する社会を言う。多言語社会は、モノリンガルの社会に別の言語グループがいくつか集住する場合や、住民が複数言語話者である場合がある。しかし、じっさいにはそのどちらかというわけではなくて、両方の特徴が混在している場合が多い。その多様な言語使用実態をイメージしやすいように、多層言語環境という用語を使うことにした。

グローバル化・情報化により人口移動が激しくなり、なおかつ出身国との通信が簡便になると、移動先でも出身国と同じ言語環境で暮らすことが可能になる。異なる言語話者が、目と鼻の先に住んでいながら互いを全く知らずに過ごすということが起こりうる。それに気づかないまま時が経ち、気づいたときには日本語だけでは立ち行かない状況になっているかもしれない。

多層言語環境になったからと言って、住民がすぐに自然に複数言語話者になるわけではない。言語が異なれば意思伝達は思うようにいかない。意思伝達が不自由であれば不満が募り摩擦が生じる。多層言語環境における摩擦を解消するために、互いの言語と文化の理解は重要である。しかし、どうすれば言語と文化を理解したことになるのだろうか。

私がアメリカに留学中、語学教員用のラウンジから魚の干物を炙ったいい匂いが漂ってきた。アジア系スタッフが昼食をとった後に違くない。食欲がわいてくる。すると、背後から人の走る音が聞こえてきた。ラウンジに飛び込んだ白人女性教師は、消臭スプレーをすさまじい勢いで噴射している。私は気がついた。ああ、あの匂いはアメリカ人にとっては悪臭なんだ。

私は、自分がしてほしいことは他人にしてはいけないと教えられて育ってきた。しかし、多層言語環境においては、自分がしてほしいこと、してほしくないことを基準にものを考えると摩擦が生まれてしまう。それで私たちは、分かり合えるのだろうか。異なる言語を話す人々が混じりあって暮らす社会は、それほど容易な社会ではなさそうである。

しかし、交通手段や電子情報機器の発達による多層言語環境化は世界規模で起こっている。こうした時代をどう生きていけばよいのだろうか。とりわけ日本人は、国内では日本語でほとんどすべての用を足してきた。こうした状況をどう切り抜けたらよいのか戸惑いがある。どのような知識や能力を持ち、どのような人材を育成していけばよいのか。

本研究は、多層言語環境の先人としての香港における言語および教育状況や、そこに生きる日本人子女の言語習得状況を考察し、また香港と日本、さらに他の地域の大学教育を結んで互恵的な外国語学習機会を創生する試みを実施することで、こうした問いに対する答えを探ろうとする試みである。

本研究を進める上では、次の各国研究者から国際シンポジウムや研究成果報告会において多大な協力と支援をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

Winnie Cheng, 松本真澄 (香港理工大学)
吉川貴子 (香港大学)
史宗玲, 吳怡萍, 黃愛玲, 陳玫君 (高雄科技大学)
葛西洋三 (静宜大学)
吉村由紀 (マサチューセッツ大学アマースト校)
Thomas Ricento (カルガリー大学)

また、本研究プロジェクトの研究分担者、研究連携協力者諸氏にもあらためて感謝の意を表する。

研究分担者

飯田真紀, 河合剛, 小林由子, 山田智久, 杉江聡子 (北海道大学)
横山吉樹 (北海道教育大学札幌校)
佐野愛子, 三ツ木真実 (北海道文教大学)

研究連携協力者

萬美保 (香港大学)
今泉智子 (北海道大学大学院博士課程)

研究成果は以下、本報告書の本編に示すとおりである。本文部科学省科学研究費補助金による研究プロジェクト成果が、日本がそして世界がその多層言語環境化に対応する一助となることを期待する。

平成 30 年 3 月

研究代表者 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
河合 靖

も く じ

まえがき	i
第1章 研究課題の概要	1
第2章 研究の進展	10
(1)平成 27(2015)年度	10
(2)平成 28(2016)年度	18
(3)平成 29(2017)年度	25
第3章 研究成果(学術論文)	34
(1)言語とコミュニケーション	
広東語の文末助詞 gE2 の意味と意味変化	
—対人的機能からテキスト構成的機能へ—(飯田真紀)	35
小説の対訳データから見る日本語・英語・中国語可能表現の特徴(今泉智子)	53
(2)施策と学習者	
多層言語社会における教育政策と制度について	
—香港の後期イマージョン教育の現状と展望—(横山吉樹)	68
香港における日本語学習と日本のポピュラーカルチャーの関連	
—内発的動機づけの観点から—(小林由子)	79
複数言語社会香港における継承日本語学習者の多様な言語学習環境(佐野愛子)	98
香港大学日本語スタンダード策定について(萬美保)	125
(3)教育と技術	
香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習(河合靖・河合剛)	141
「グローバル」という概念を日本人大学生はどのように捉えているのか	
—日港学生の PAC 分析比較調査から—(山田智久)	172

多層言語環境に生きる英語話者とのコミュニケーション	
—オンライン英会話を取り入れた授業実践と学習者の評価—(三ツ木真実)	187
日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究(杉江聡子)	206
第4章 国際会議等の報告	225
(1) 第二十回国際粵方言研究会	
(The 20th International Conference on Yue Dialects)	225
(2) TCLT2016	
(The 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching)	230
(3) 第三十四回中華民国英語文教学研究国際検討会	
(The 34th International Conference of English Teaching and Learning)	235
あとがき	245
業績一覧	246

第1章 研究課題の概要

研究課題名 平成27年～平成29年度 科学研究費補助金 基盤研究 (B) (一般)
「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」

研究課題番号 15H03221

研究代表者 河合 靖 (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授)

研究組織

研究代表者		
氏名	所属研究機関／部局／職	研究役割分担
河合 靖	北海道大学／大学院メディア・コミュニケーション研究院／教授	国際シンポジウム企画実行責任者。応用言語学と教育学の知見を適応して、香港と日本の大学生の外国語学習における互恵的自律学習プログラムの開発をめざす (教育と技術)。成果報告書の作成。

研究分担者		
氏名	所属研究機関・部局・職	研究役割分担
飯田 真紀	北海道大学／大学院メディア・コミュニケーション研究院／准教授	香港の多言語社会を構成する、広東語、北京語 (普通話)、英語、さらに本研究で日本との互恵的第二言語学習の対象となる日本語を対象言語学的に分析考察する (言語とコミュニケーション)。
河合 剛	北海道大学／大学院メディア・コミュニケーション研究院／教授	応用言語学と教育学の知見を適応して、香港と日本の大学生の外国語学習における互恵的自律学習プログラムの開発をめざす (教育と技術)。
小林 由子	北海道大学／国際連携機構 国際教育研究センター／教授	香港の大学生の日本語学習: 香港の日本語学習者が持つ学習動機づけを、青少年期のポップカルチャー・サブカルチャーへの興味を軸に資料を収集し、インタビューや質問紙調査によってデータを分析し、考察する (施策と学習者)。

山田 智久	北海道大学／国際連携機構 国際 教育研究センター／准教授	応用言語学と教育工学の知見を適応して、香港と日本の大学生の外国語学習における互恵的自律学習プログラムの開発をめざす（教育と技術）。
横山 吉樹	北海道教育大学札幌校／教授	香港の教育的言語政策：香港の学校教育政策の変遷を考察し、その背景を資料やアンケート・インタビューなどの情報をもとに考察する（施策と学習者）。
佐野 愛子	北海道文教大学／外国語学部 国 際言語学科／准教授	香港の日本人子女の言語発達：香港における日本人児童生徒の言語習得の状況を、とくにライティングの2言語能力発達に焦点をあてて、カナダなど他の地域の日本人児童生徒と比較して考察する（施策と学習者）。
三ツ木 真実	北海道文教大学／外国語学部 国 際言語学科／講師	ICT を活用した英語教育実践を行い、認知言語学の知見に基づき評価・分析を行う（教育と技術）。
杉江 聡子	北海道大学／大学院メディア・コ ミュニケーション研究院／学術研 究員	中国語学習者のための e ラーニング教材を開発し、遠隔交流を活用した中国語教育実践を行い、混合研究法を用いて評価・分析を行う（教育と技術）。本科研プロジェクト WEB サイトの構築。成果報告書の作成。

研究協力者		
氏名	所属研究機関・部局・職	研究役割分担
萬 美保	香港大学／the Department of Japanese Studies / Senior Lecturer	香港における日本語教育の現状分析及び教育実践に関する報告を行う。連携協力者として、科研プロジェクトに関わる研究活動において、香港側との調整役を務める。
今泉 智子	北海道大学／大学院国際広報メデ ィア・観光学院／博士課程	香港の多言語社会を構成する、広東語、北京語（普通話）、英語、さらに本研究で日本との互恵的的第二言語学習の対象となる日本語を対象言語学的に分析考察する（言語とコミュニケーション）。

研究経費

■ 交付決定額（配分額）

（単位：千円）

年 度	直接経費	間接経費	合 計
平成 27 年度	6,900	2,070	8,970
平成 28 年度	3,100	930	4,030
平成 29 年度	3,100	930	4,030
総 計	13,100	3,930	17,030

■ 研究の概要

① 研究の目的

本研究の目的は、理論言語学・応用言語学・教育学など多面的なアプローチを用いて包括的に多言語社会を考察することで、東アジア圏においてヨーロッパ型の複言語主義に基づいた多言語コミュニケーション共同体を創生する可能性と方策を探求することである。地理的・経済圏的に日本と同じ東アジア圏にある香港をとりあげて、日本とは異なるこの国の多言語使用状況について言語・文化・社会を包括的に考察し、複数言語使用社会の実態・実情に関する基礎的知見を得る。また、香港の第二言語教育者と連携して、複言語主義に沿った二言語併用互惠の外国語共修授業を開発するアクション・リサーチを行う。これら二つの方向のアプローチが相互補完的に作用して、東アジア圏の複言語主義的言語コミュニティの構築に貢献することをめざす。

② 研究の背景

1. 複言語主義的言語能力観と translanguaging（複数言語併用）

ヨーロッパの言語教育において、複言語主義に基づいた、内容を重視した言語運用能力の育成が行われている（CLIL: Content and language integrated learning）。その特徴は、外国語教育および数学、理科、社会などの専門科目において、バイリンガルの教師が学習指導時に複数言語間を往き来するところにある。この言語の往き来は translanguaging と呼ばれている。ここでは、複数言語併用と呼ぶことにする。

従来、複数言語を話す人が言語を切り替える行為は、code-switching と呼ばれ、バイリンガル社会で広く観察されてきた。しかし、これは、しばしば否定的な意味合いを伴って使われてきたことも否めない。それは、モノリンガルの言語に対する価値観と相反するからであり、また、不完全な言語習得の結果、一つの言語で意思伝達を維持できない場合に生じる行為であると考えられるからである。また、同様なことは、第二言語話者の code-switching についても当てはまり、目標言語のみでコミュニケーションを成立させるという第二言語教育の目的に反しているとみなされることが多い。

複数言語間を往来する同じ現象でありながら、複数言語併用（translanguaging）という別の用語を肯定的な含意で用いることにこだわる背景には、ヨーロッパにおける言語政策上の理念がある。1970年代からヨーロッパ域内の交流と発展を目指して、旅券審査の廃止や通貨の統一を実現してきた。言語についても、Unity in diversity を標

榜して、共同体構成員が相続言語（母語）を捨てることなく、しかし相互の意思伝達を可能にするために、「すべてのヨーロッパ人をバイリンガルに」というスローガンが掲げられる。そこでは、必要最小限度の言語運用能力を複数持ち合うことを目指していた。母語話者並の高度な熟達度が目標となっていたわけではない。次第に目標が高度化して6段階の言語熟達度が行動指標により記述され、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に発展する。しかし、基本的には話せる範囲内で複数言語を使い、自分とは異なる母語を持つ人と、必要に応じて言語を切り替えながら意思の疎通を図る社会を目指してきた。

アメリカでバイリンガル教育が発展してくる背景には、言語集団間の力関係の構図があり、少数派集団の多数派集団への適応、すなわち言語的には多数派言語の母語話者をモデルとした熟達度の達成を目標とする二言語能力の育成が課題であった。これに対して、カナダの多文化共生をめざした多言語主義やヨーロッパの複言語主義では、第二言語を目的に応じて用が足りる程度に使えることが課題となる。第二言語話者なりの熟達度が達成目標で、コミュニケーションへの参加者は理想的には皆、さまざまな組み合わせの二言語話者であり、そこでは二言語の併用は異端視されない。複言語主義社会のめざす第二言語話者像に方向づけされた教育方法として、複数言語併用（translanguaging）が登場していると言える。

2. 日本の言語教育政策の動向と東アジアの地理的視点から見た今後の方向性

日本の学校教育における英語教育政策は、近年めざましい進歩をとげている。バブル経済崩壊後、日本の国際的地位の低下を危惧して、英語第二公用語論、英語が使える日本人育成のための戦略構想、グローバル人材育成のためのさまざまな教育施策が取られてきた。背景には、人・物・情報の国際化と、それにとまなう経済・社会・文化の国際競争の激化がある。英語が話せないことが問題の根源であり、英語話者の飛躍的増加が国家的急務であると考えられている。基本的目標は日本国家の生き残りであり、競争主義的世界観にもとづいている。

こうした英語教育政策に対する賛否とも、日本中心の世界観から脱していない。大多数の日本人には英語が必要ないとする実用英語教育に対する批判がある反面、英米人に対する憧憬から英語母語話者をモデルとした英語運用能力の育成に対する欲求も見られる。

地球規模で物・人・情報がグローバル化していく途上にあるのは間違いないことであり、非日本語話者との接触は今後確実に増えていく。しかし、日本で非日本語話者と英語で意思伝達する場合、英語母語話者以外の英語話者である確率が高いし、使われる英語も多様を極めている。

非日本語言語コミュニティの拡大が日本のグローバル化を示す一つの現象であるとするれば、そうした言語コミュニティが日本国内に出現・拡大しつつあることは疑い得ない。たとえば、日常的に海外支社とネット上で社内会議を行う人達がいる。会議は、インド、中国、インドネシア、スコットランド、韓国などと結ばれる。母語話者、第二言語話者、外国語話者が入り乱れて、彼らの多様な英語を理解する必要が生じる。あるいは、大学の研究室には来日したてで日本語が不得手な留学生がいる。英語に堪能な教授は当然のように英語で指示し、メールを送る。日本人学生はそれを理解して

実験報告やレポートを提出しなければならない。日本が多言語社会化している現実は存在し、その現実を日常とする人とそれに気づかない人がいるのが現在の日本である。日本語モノリンガル社会と非日本語コミュニティとの利害調停に問題の主眼が向かえば、アメリカのバイリンガル教育的多言語主義への道となる。日本の国益のみに縛られずに、近隣地域の共存共栄を目標に言語多様性に対応する社会の構築を目指せば、複言語主義への道となる。

多文化状況下で共生的な適応ができる人間こそが、これからのグローバル人材の人物像である。東アジア圏の経済的・文化的交流が盛んになるにしたがって、域内に生きる人々の複眼的な視点と態度の涵養が急務となる。日本、韓国、中国を見たときに、それぞれの国は基本的にモノリンガルで（中国は国土が広く、例外は多いが）、アメリカのように移民が多数存在して少数派と多数派の言語的軋轢が大きな問題となっているわけではない。今のところヨーロッパほど域内の人の移動が頻繁ではないが、このまま東アジアにおいても人的交流・移動が活発化していけば、やがてヨーロッパと同様の状況が生まれると思われる。東アジアを経済圏・文化圏として見たときに、アメリカよりもヨーロッパに近いと考える妥当性がある。だとすれば、私たち域内住民が、目的に応じた第二言語話者なりの複数言語の熟達度を身につけることが課題となってくる。本研究は、日本の外国語教育においては複言語主義的教育観を取るべきであるという立場で、東アジア圏における複言語主義的な言語社会の構築へ向けた課題に応える研究を推進するものである。

③ 研究で明らかにする内容

本研究の研究期間は3年間である。東アジア圏での複言語主義的な言語コミュニティの創生を究極的な目的としているが、本研究はその最初のプロジェクトとして、アジア圏で多言語社会の代表とされている香港をとりあげ、その実態と課題を考察し、あわせて香港と日本の学生が互恵的に日本語・英語・中国語の学習を行う教育システムを試行する。香港におけるこのプロジェクトが成果を収めることは、その後他の東アジア地域で同様の手法による研究を進める礎となる。

④ 研究の特色・独創性・意義

本研究の特色は学際性にある。日本で実際に本研究を遂行しようとする、日本語、英語、中国語、韓国語など言語別の学会が分化しており、研究者の相互交流が難しい。また、言語学、言語教育、異文化コミュニケーションなどの学問分野の区分も障害となる。一見ありふれた研究テーマであるが日本の学問風土では実行が困難であり、それを打ち破る試みである点に特色がある。

本研究の独創性は、その理論的基盤にある。ヨーロッパの複言語主義をアジアの文脈で時代性を考慮して適用する妥当性を議論するところに独創性がある。

本研究の意義は、包括的な研究アプローチにある。理論言語学的考察から外国語教育への提言までを有機的に含んだ研究プロジェクトが成功すれば、今後他の研究デザインのモデルとなる。

⑤ 研究計画・方法

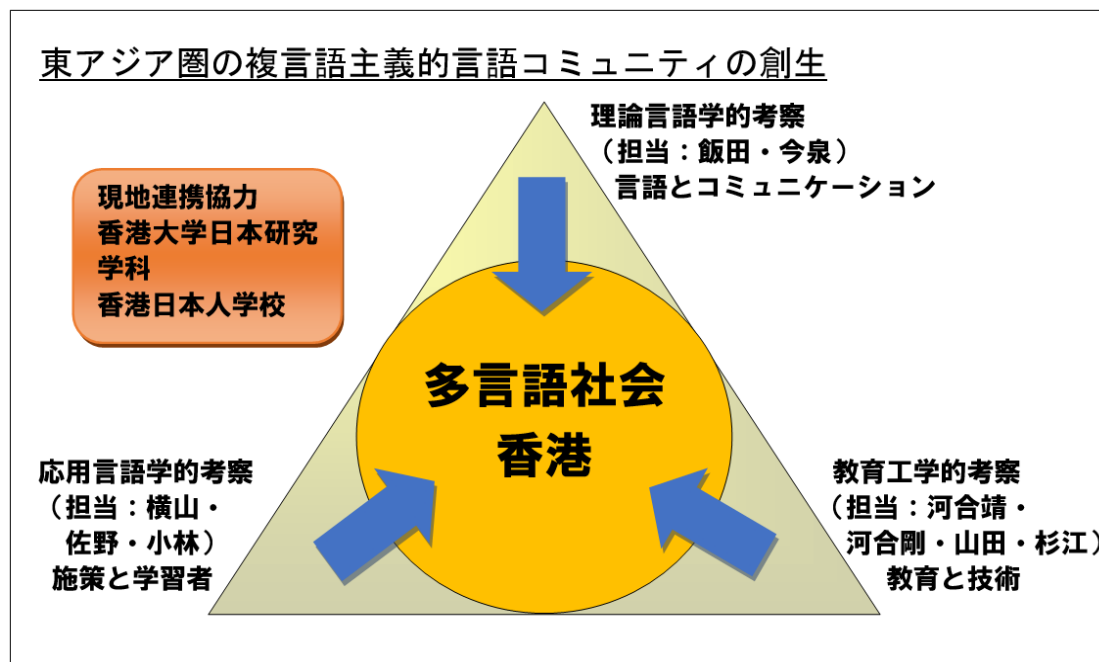
本研究は、(1) 香港の教育制度における言語政策の変遷と現況の現地調査、(2) 香港在留の日本人子女の言語教育状況の現地調査と彼らの言語習得状況の実態調査、(3) 香港居住者

の使用言語に関する対照言語学的考察、(4)香港の中国人大学生の日本語学習者への日本語・日本文化に対する意識調査、(5)香港と日本の学生による互恵的外国語共修システムの構築と試行から成り立つ。5つの研究課題を考察対象により3つのグループに分けて研究を進める。年に1回（初年度は3回）、研究分担者が連携協力者および関係分野の専門家や教育実践者を交えて、香港あるいは日本で研究成果を途中報告しながら、適宜改善を加えて、最終年度に国際大会でシンポジウムを開催する。

■研究の枠組み

東アジア地域における複言語主義的言語コミュニティの創生を目指した研究の遂行にあたり、次の三つの観点を研究の枠組みとする。

1. 東アジア域内で使用・学習されている言語の特徴および差異を対照言語学などの手法を用いて分析し、言語接触場面での誤解やコミュニケーションの断絶の原因解明と解決への示唆を行う。(言語とコミュニケーション)
2. 東アジア域内の言語教育政策を国際的な視点から考察し、第二言語習得・教育心理学の知見に基づいて自律的第二言語学習者の支援へ向けた示唆を行う。(施策と学習者)
3. 理論言語学・応用言語学・教育学などの知見を援用して、第二言語教育の先進的あるいは実験的事例を検証・考察し、複数言語話者の育成を促進する。(教育と技術)



■運営・研究組織

1. 運営の中心

本研究の活動拠点を北海道大学メディア・コミュニケーション研究院におき、研究代表者河合靖が恒常的に、研究全般の運営管理と情報の伝達を行う。また、香港連携協力者として萬美保香港大学日本研究学科長が現地の調整役にあたる。

2. 研究組織

研究代表者：河合靖（北海道大学）

研究分担者：飯田真紀・河合剛・小林由子・山田智久（以上、北海道大学）・横山吉樹（北海道教育大学札幌校）・佐野愛子（北海道文教大学）

連携協力者：萬美保（香港大学）・今泉聡子・杉江聡子（以上、北海道大学大学院博士課程）

3. 情報の蓄積

本研究のサイトをメディア・コミュニケーション研究院のホームページ上に置き、研究分担者・連携協力者間の情報交換を行う。また、勉強会・研究会での研究成果を随時蓄積し公表する。

4. 研究の分担

(1) 言語とコミュニケーション（担当：研究分担者飯田・連携協力者今泉）

香港の多言語社会を構成している、広東語、北京語（普通話）、英語、さらに本研究で日本との互恵的第二言語学習の対象となる日本語を対象言語学的に分析考察する。まず、広東語について、コミュニケーションに関わりの大きい言語現象(話し手による聞き手目当ての配慮・注意を表しわけ<談話モダリティ形式>、話し手による事象目当ての態度・信条を表しわけ<モダリティ形式>など)を認知言語学的手法などで分析する。また、これらの言語現象や、言語による「捉え方・視点」、言語による多義関係の相違などについて、広東語・北京語(普通話)、英語、日本語の比較対照、ならびにバイリンガルとモノリンガルの違いを考察する。現在、可能表現、知覚表現などを分析対象に考えている。

(2) 施策と学習者（担当：研究分担者横山・佐野・小林）

本節は、教育的言語政策、日本人子女の言語発達、大学生の日本語学習の3要素からなる。

(2)-1. 香港の教育的言語政策：香港の学校教育政策の変遷を考察し、その背景を資料やアンケート・インタビューなどの情報をもとに考察する。中国変換後、広東語・北京語（普通話）・英語の3言語の運用能力向上を目指して種々のバイリンガル教育が展開された状況に焦点をあてる。香港の英語教育は、返還後、後期イマージョンの方向に進み、それに行き詰まると、バンドシステム（受験者の能力に応じて、イマージョンの割合を変えた学校群を受験）へと変化していった。その変化は、香港の社会では学歴を重視するという風土とも相まって、広く浸透しつつある。また、その制度は、初等教育にも影響を及ぼし、1年生から英語のリタラシー教育に力を入れる小学校が増えている。本研究では、教育制度、保護者の考えなどをアンケートやインタビューなどで追跡することで、バンドシステムが浸透している理由を捉え、一方、後期イマージョンが受け入れられなかった理由も同時に考察する。

(2)-2. 香港の日本人子女の言語発達: 香港における日本人児童生徒の言語習得の状況を、とくにライティングの2言語能力発達に焦点をあてて、カナダなど他の地域の日本人児童生徒と比較して考察する。加速度的にグローバル化が進む中、高い多言語能力を有する人材の必要性が社会的に高まっている。バイリンガル児童・生徒は話す能力だけでなく、読み書きにおいても2言語での高い能力が求められており、その発達を支える教育的支援の模索が喫緊の課題である。香港在住の日本人子弟・国際結婚家庭の子女が書く日英2言語（あるいは中国語を含む3言語）の同一テーマでの作文を対象として、言語間の作文力の関係とその発達に関わる要因を分析する。カナダでの調査と比較することで、アジア圏の多言語能力育成のあり方を考察し、高い多言語能力を持つ人材育成に資することを目指す。

(2)-3. 香港の大学生の日本語学習: 香港の日本語学習者が持つ学習動機づけを、青少年期のポップカルチャー・サブカルチャーへの興味を軸に資料を収集し、インタビューや質問紙調査によってデータを分析し、考察する。複言語主義的多言語社会では、異文化接触が第二言語習得動機づけへしばしば影響する。香港の大学生日本語学習者に、日本のポップカルチャーへの関心、その関心が日本語学習のきっかけになっているか、および、学習継続の要因になっているかについて、自由記述の形で情報収集する。次に、収集されたデータに基づいて質問紙を作成し調査を行い、日本のポップカルチャーへの関心が日本語学習動機とどう結びついているか明らかにする。あわせて、深い情報を得るためのインタビュー調査で質的にデータを精緻化する。併行して、香港で日本のポップカルチャーがどう受容されているか、出版・放送・映像の観点から情報収集を行い、社会的・歴史的な裏付けを得る。

(3) 教育と技術（担当：研究代表者河合靖・研究分担者河合剛・山田智久・杉江聡子）

応用言語学と教育工学の知見を適応して、香港と日本の大学生の外国語学習における互恵的自律学習プログラムの開発をめざす。主に日本語と英語を対象言語とし、中国語・広東語についても同種の学習プログラムの可能性を検討する。対象の熟達度は、英語については中級、日本語、中国語、広東語については初級から中級の学習者とする。

(3)-1. 日英互恵的第二言語学習プログラム: 日本語と英語の学習については、既習の言語項目を活用しながら内容中心の言語活動を日本語と英語で交互に行う。言語活動に必要な言語項目と読解および聴解教材の学習はコンピュータによる事前の自律学習によって実施し、授業は香港と日本をオンラインで結んだ文字チャット・ビデオチャットや、香港・日本双方の地元にいる目標言語話者を活用した対面言語活動を組み合わせて、実技中心で行う。授業評価は、学習者からの質問紙に対する回答と標準化された手法（COLT、MOLTなど）による授業分析を用いて行う。

(3)-2. 日本人中国語遠隔学習プログラム: 中国語・広東語と日本語の学習については、北海道・札幌の観光都市化にともなう複言語主義的対応の必要性についてニーズ調査を実施し、それにもとづいたeラーニング教材を開発する。この教材を使った数週間の自律学習ののち、2回程度遠隔授業で日本と香港の学習者が実践会話する反転学習を行う。テーマは「日本で習う中国語、香港とはどこが違う？カフェで接客してみよう！」など。授業終了後、双方の学習者から質問紙により学習活動の評価を受ける。

●初年次実施計画：平成 27 (2015) 年度

- ・ 年 3 回勉強会あるいは研究会を実施。うち 1 回を香港で開催。3 分野それぞれの文献研究成果の報告とデータ収集状況の中間報告を行う。国内で行う 3 回目は公開のシンポジウムとし、国内外の関連分野の研究者を指定討論者として招待する。
- ・ コミュニケーションに関わりの大きい、特定のいくつかの言語現象について、広東語、北京語（普通話）、英語、日本語におけるデータを、母語話者聞き取り調査やコーパス調査から集める。
- ・ 香港の学校制度に関して、関連行政府や学校を視察する。
- ・ 香港日本人学校・補習授業校・その他日本語の継承語教育機関を訪問し、教育状況を視察するとともにデータ収集を依頼する。収集したデータは将来的に多言語作文データベースへの集約を目指し、適切に同意書を得るものとする。このデータは、すでに構築中の日英バイリンガル作文のデータベースの拡充に利用される予定である。
- ・ 香港大学生へのポップカルチャー・サブカルチャーからの動機づけ調査質問紙開発のためのインタビュー、自由記述調査を実施する。
- ・ 香港におけるポップカルチャーの受容について、いつから、どのようなものが受容されてきているのかについて、歴史的・社会的な観点から調査を行う。
- ・ 互恵的日本語・英語・学習教材の作成へ向けて、ニーズ分析のための香港大学生・日本人大学生への質問紙調査を実施し、教材開発を行う。(印刷費、情報機器、国外旅費)
- ・ 中国語学習における複言語主義的な e ラーニング教材を開発する。日本と香港での遠隔授業の学習環境を確認する。

●2 年次実施計画：平成 28 (2016) 年度

- ・ 28 年以降は調査を継続しながら、日本語・中国語・英語の対照言語学的考察、香港学校教育言語政策の変遷と現況、香港日本人児童・生徒の複数言語運用能力の発達状況、香港大学生の日本語学習動機づけについてまとめる作業をする。
- ・ 香港と日本の互恵的日本語・英語自律学習プログラム開発を行い、その試行を実施する。
- ・ 研究成果を国内外の学会で発表する。

●3 年次実施計画：平成 29 (2017) 年度

- ・ 平成 29 年度は最終年度であることから、本研究を締めくくる国際シンポジウムを開催し、研究結果を国民にも広く報告する。

第2章 研究の進展

(1) 平成27(2015)年度

- 第1回例会：研究打ち合わせ会及び勉強会（2015年7月11日10時～12時、北海道大学学術交流会館第二会議室）を開催した。
- 第2回例会：研究打ち合わせ会及び情報交換会（2015年9月21日10時30分～12時30分、香港大学）を開催した。
- 第3回例会：国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」（2016年3月8日、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）を開催した。(1) 基調講演、(2) フォーラム・ディスカッション、(3) 分科会・研究発表の3部構成とした。分科会は、日本語による発表と英語による発表の2会場を設定した。詳細は以下の通りである。

大会テーマ：「東アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆
(Preparing Students for Communicating in East Asia)」

日時：2016年3月8日（火）13時～17時35分

場所：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院（北区北17条西8丁目）

プログラム：

(1) 基調講演（同時通訳付）

講演者：Dr. Winnie Cheng（香港理工大学）

題目：English Communication for Hospitality and Tourism Management: Curriculum development, implementation and evaluation（ホスピタリティ・ツーリズムマネジメントのための英語コミュニケーション—カリキュラムの開発・実施・評価）

(2) フォーラム・ディスカッション：「東アジア次世代のコミュニケーション促進と大学外国語教育」（同時通訳付）

招待講演：萬美保（香港大学）

題目：香港大学日本研究学科における日本語 Can-do-statements の開発と実施

質問者：小林由子・佐野愛子・Chuck Brown

指定討論者：Winnie Cheng・横山吉樹

(3) 分科会・研究発表

発表者：

河合靖（北海道大学）・三ツ木真実（北海道文教大学）「Hong Kong and Hokkaido online language exchange program」

飯田真紀（北海道大学）「終助詞（文末助詞）の機能と特徴～広東語・北京語・日本語の場合～」

小林由子 (北海道大学) 「香港の大学生はどのように日本語を学んでいくのかーポップカルチャーとの関連を中心にー」

横山吉樹 (北海道教育大学) 「Late immersion and band system in Hong Kong」

佐野愛子 (北海道文教大学) 「Literacy development of Japanese-English bilinguals growing up in multilingual Hong Kong」

杉江聡子 (北海道大学・院) 「遠隔交流を活用したブレンド型学習のためのインストラクショナル・デザイン」

今泉智子 (北海道大学・院) 「能力・可能性を表す表現の多義性についてー日・中・英語の比較ー」

Chuck Brown (北海道大学) 「Language ideologies and English learning in Taiwan」

Cassandra Kawai (北海道大学) 「Creative writing in a second language: A way of thinking, of being, of figuring things out」

科研B「東アジア圏の複言語主義共同体の構築ー多言語社会香港からの示唆」(香港プロジェクト)

国際シンポジウム

Preparing Students for Communicating in East Asia
(東アジアの言語コミュニケーションを考えるー多層言語社会香港からの示唆)

日時: 2016年3月8日(火) 13時00分 開始
場所: 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 (105室・307室)
(札幌市北区北17条西8丁目)

プログラム

13:00 - 14:00 (105室): Winnie Cheng (香港理工大)
基調講演「English Communication for Hospitality and Tourism Management: Curriculum development, implementation and evaluation (ホスピタリティ・ツーリズムマネジメントのための英語コミュニケーション・カリキュラムの開発・実施・評価)」[同時通訳付]

14:00 - 15:00 (105室): フォーラム・ディスカッション「東アジア次世代のコミュニケーション促進と大学外国語教育」[同時通訳付]

14:00 - 14:15 萬美保 (香港大学)
「香港大学日本研究学科における日本語 Can-do-statements の開発と実施」

14:15 - 14:40 質疑応答 (質問者: 小林由子・佐野愛子・Chuck Brown)
14:40 - 15:00 指定討論 (討論者: Winnie Cheng・横山吉樹)

15:00 - 17:30 口頭発表

日本語発表室 (105室)	英語発表室 (307室)
15:00~小林由子: 香港の大学生はどのように日本語を学んでいくのかーポップカルチャーとの関連を中心にー	15:00~横山吉樹: Late immersion and band system in Hong Kong
15:30~飯田真紀: 終助詞(文末助詞)の機能と特徴 ~広夏語・北京語・日本語の場合~	15:30~佐野愛子: Literacy development of Japanese-English bilinguals growing up in multilingual Hong Kong
16:00~今泉智子: 能力・可能性を表す表現の多義性についてー日・中・英語の比較ー	16:00~Chuck Brown: Language ideologies and English learning in Taiwan
16:30~杉江聡子: 遠隔交流を活用したブレンド型学習のためのインストラクショナル・デザイン	16:30~Cassandra Kawai: Creative writing in a second language: A way of thinking, of being, of figuring things out
	17:00~河合 健・三ツ木真実: Hong Kong and Hokkaido online language exchange program

17:30 - 17:35 (307室) 閉会式

(担当: 河合健。問い合わせ先: kawai@mc.hokudai.ac.jp)
桜イラスト: <http://flowerillust.com/html/sakura/sakura023.html> (コピーライトフリー)

図1 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考えるー多層言語社会香港からの示唆」ポスター

(1) 基調講演

Speaker: Winnie Cheng (Director, Research Centre for Professional Communication in English / Professor, Department of English The Hong Kong Polytechnic University)

Title: English Communication for Hospitality and Tourism Management: Curriculum development, implementation and evaluation (ホスピタリティ・ツーリズムマネジメントのための英語コミュニケーション・カリキュラムの開発・実施・評価)

Abstract: The talk aims to evaluate the coherence of a subject ELC3721 English Communication for Hospitality and Tourism Management, offered by the English Language Centre (ELC) of The Hong Kong Polytechnic University, by applying the decision-making framework for the coherent language curriculum (Johnson, 1989). The framework comprises four stages of policy decision making, namely curriculum planning, ends/means specification, programme implementation, and classroom implementation, with evaluation being crucial in a coherent and integrated curriculum. The talk discusses and evaluates the coherence of ELC3721 stage-by-stage, followed by a discussion of how pragmatic constraints and challenges have affected the effectiveness and coherence of the subject.

Introduction of a Guest Speaker: Professor Winnie Cheng is Associate Dean, Faculty of Humanities, Professor of English and Director of Research Centre for Professional Communication in English (RCPCE), Department of English, The Hong Kong Polytechnic University. She is a Founding Fellow of the Hong Kong Academy of the Humanities. Her research interests include ESP, intercultural pragmatics and communication, corpus linguistics, conversation analysis, critical discourse analysis, and discourse intonation. Her book publications include Enhancing students' professional competence and generic qualities through writing in English across the curriculum (2014), Exploring corpus linguistics: Language in action (2012), A corpus-driven analysis of discourse intonation (2008), and Intercultural conversation (2003). She has published over 100 journal articles and book chapters and given over 100 invited plenary speeches and workshops at international conferences.

(2) フォーラム・ディスカッション:「東アジア次世代のコミュニケーション促進と大学外国語教育」

① 招待講演

講師: 萬美保 (香港大学 日本研究学科)

題目: 香港大学日本研究学科における日本語 Can-do-statements の開発と実施 (Making HKU Japanese Language Standards (HKUJLS) by Using Can-do-statements)

要旨: 香港大学日本研究学科日本語プログラムでは、2007年から約4年をかけて Can-do-statements による香港大学日本語スタンダード(HKUJLS)を策定した。HKUJLS は、必修日本語科目(日本語コア)8レベル5技能(読む・書く・聞く・話す・会話)に亘る40のマトリックスからなる。この発表では、まず、HKUJLS 作成の背景として、①日本語コアカリキュラム全体の見直しの必要性、②学習の流動化・学習背

景の多様化、③Outcome-based Teaching and Learning (OBTL)と Intended Learning Outcomes(ILO)といった大学の新しい教育方針の推進について説明する。続いて、日本語コアのゴールとマトリックス例を提示しながら、目指すべき日本語運用能力に加えて HKUJLS の内部整合性とレベル間の繋がり、そして大学・学院・学部・学科間の ILO の整合性についても触れる。HKUJLS の作成を担当した教員から寄せられた感想では、①効果的な指導と評価、②教員間の目標の共有、③教師としての自信など、費やされた多大の時間と労力にもかかわらず、ポジティブな反応が示された。大学当局によって新4年制カリキュラムの教育方針が発表されて以来、学内では OBTL と ILO の定着が進む。一方日本語プログラムにおいても、HKUJLS の改良とともに、教員と学生のための内部指標としての HKUJLS から外部指標としての利用に向けて、いくつかの新しい取り組みが行われている。

In the summer of 2007, the team of Japanese language teachers began writing HKU Japanese Language Standards (HKUJLS). HKUJLS has 40 matrixes covering 5 areas of language competency (reading, writing, listening, speaking, and interacting) as well as the 8 levels of the Japanese language courses that are compulsory to those who major in Japanese studies or minor in Japanese language. In the first stage of the formulation of the standards the teachers identified pedagogical problems, and the reexamination of the curriculum that was being used at that time was proven to be critical. Increasing levels of student mobility and the diversity in their learning backgrounds were also an important factor for us to accept the challenge of rewriting the entire curriculum. In addition, the University put forward educational principles such as Outcome-based Teaching and Learning (OBTL) and Intended Learning Outcomes (ILO) for the new 4-year curriculum that was to be implemented from 2012. After describing the above background, I will present the Japanese Program's teaching goal and objectives that are written in the form of "Can-do-statements" and how the components of HKUJLS matrixes are aligned and articulated with each other. My discussion also includes the reactions displayed by teachers involved in the process of writing the standards, the University's attempt to consolidate the OBTL and ILO principles, and the Japanese team's continuous efforts to improve HKUJLS.

② 質疑応答: 小林由子・佐野愛子・Chuck Brown

③ 指定討論: Winnie Cheng・横山吉樹

(3) 分科会・研究発表

発表者: 小林由子 (北海道大学 留学生センター)

題目: 香港の大学生はどのように日本語を学んでいくのか—ポップカルチャーとの関連を中心に

要旨: 本研究の目的は、マンガ・アニメーション・ゲームなど日本のポップカルチャーがきっかけで日本語を学び始めた、日本語を専攻とする香港の大学生が、どのようなプロセスで日本語を学んできたか、また、日本語学習についてどのような展望を持っているかを、

質的に明らかにすることである。従来の日本語教育分野における学習動機づけ研究には、ある地域において学習者がどのような日本語学習動機を持っているのかを量的に明らかにするものが多くある。日本文化は、多くの先行研究において、日本語学習の重要な因子となっている。とりわけ、マンガ・アニメーション・ゲームなどのポップカルチャーが学習のきっかけとして挙げられることが多い。では、それらのポップカルチャーは、日本語学習においてどのような役割を果たすのだろうか。また、ポップカルチャーをきっかけに日本語を始めた学習者は、どのように学びを深めていくのだろうか。今回の調査では、4名の上級日本語学習者を対象にインタビューを行い、質的な検討を行った。その結果、それぞれの学習者が異なる志向を持っていることが明らかになった。ゲームやアニメーションが学習の主目的になっていることは少なく、ポップカルチャーがきっかけで始まった日本語学習が、就職・日本語の訓練・研究など、それぞれ異なった方向で深まっているといえる。

発表者：横山吉樹（北海道教育大学札幌校）

Title : Late immersion and band system in Hong Kong

Abstract : Hong Kong education system is very challenging in that it attempts to implement an innovative approach to language learning called “late immersion programs.” This study attempts to investigate how Hong Kong education system and its reforms reflect growing need for English education in a multilingual society. In Hong Kong, there are significant reforms made in 1990 and in 2000, which shifted their system to the late immersion programs and banding system. Content-based instruction, in which learners learn a second language simultaneously, as they study subject matter contents, has been practiced in a great variety of approaches. Among them, French immersion programs in Canada have been implemented since 1960s in Canada (Lambert & Tucker, 1972) and well-known for its longevity for nearly half century. A bulk of research has shown that French immersion programs have succeeded in developing good listening skills, fluency, and confidence in production of second language. Hong Kong immersion programs differs from French immersion in Canada in that it starts in secondary schools, and it does not necessarily presuppose that language proficiency, unlike early immersion, follows cognitive development. It is also unique in that it comes with the band system. The interviews conducted for this study shows some aspects of the Hong Kong programs. There are some “band 1” schools whose medium of instruction is exclusively English. But language instruction in many of Hong Kong middle schools varies with band systems and grades. More details about “band 1” schools and immersion programs will be discussed in the presentation.

発表者：飯田真紀（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）

題目：終助詞（文末助詞）の機能と特徴～広東語・北京語・日本語の場合～

要旨：広東語には文末助詞(終助詞)が非常に多くあり、会話では頻繁に使われることが知

られている。また、広東語ほどではないが、同じく中国語方言の1つである北京語についても同様である。他方、日本語はこれらの言語とは言語的類型を異にしているにもかかわらず、やはり終助詞を豊富に持ち、会話ではほぼ義務的に使われる。終助詞については、近年、世界の様々な言語を視野に入れた類型論的研究で、独立した言語カテゴリーとして議論され始めてはいるものの、前述の広東語・北京語・日本語ならびに東南アジアの諸言語における終助詞と、英語・ドイツ語といったヨーロッパ言語で終助詞と定義されるものとは、機能面や形式面において大きな隔たりがあると見られる。本発表では、前者に属す広東語・北京語・日本語の終助詞について、機能および形式面での広範囲にわたる互いの共通点を指摘する。その上で、これらの言語間における個々の終助詞の意味機能や由来(文法化経路)などの相違点を述べる。本発表により、個別言語だけでなく、広く東アジア・東南アジア諸言語に特有の文法カテゴリーとしての終助詞に対する理解を深め、ひいては通言語的研究に資することを目指す。

発表者：佐野愛子（北海道文教大学）

Title : Literacy development of Japanese-English bilinguals growing up in multilingual Hong Kong

Abstract : Writing itself is a highly cognitive activity in the first place, and becomes even more complex someone is trying to write in his/her second language. The writing abilities in the first language has been reported to transfer to a second language (e.g. Francis, 2000; Lanauze & Snow, 1989; Sano et al. 2014), and sometimes the reverse is true as well (Verhoeven, 2002). In this global era, as people travel across borders so do their children at school age, and thus more and more children are facing the task of learning to write in tow more languages simultaneously. Research in literacy development of school-aged bilinguals are urgently called for, reflecting such globalising reality of the modern world. The factors such as length of residence in the host country and the age of arrival at the host country have been argued to be of significance in studying literacy development of bilingual writers, as well as other linguistic factors such as the languages spoken at home, and literacy engagement in various languages both at home and at school. However, such framework seems to be unable to capture the fluidness and complexity of multilingual Hong Kong, where parents try to maximise linguistic opportunities for their children resulting in a highly complex linguistic profiles of children. In this presentation, the complexity of educational choices the parents make for their children will be illustrated. It will also report how young bilinguals themselves view their literacy development, and the framework that serves to capture the complexity of literacy development in such a society will be discussed.

発表者：今泉智子（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院・博士課程）

題目：能力・可能性を表す表現の多義性について一日・中・英語の比較—

要旨：「～ができる」という「能力」の意味は、言語的・文化的背景に関わらず同じように

経験し、理解される 普遍的な意味であるといえるが、言語によってその表し方は大きく異なる。「能力」や「可能性」は、英語 では助動詞“Can”、“ May”、中国語では助動詞“能”、“会”、“可以” 及び可能補語形式、日本語では“～（ら）れる”によって表される。全て「能力」や「可能性」を表す形式であるにも関わらず、その文法的カテゴリーや多義関係には大きな違いがある。英語と中国語の助動詞は一般的にモダリティとして扱われ、“root/epistemic possibility”に基づく多義関係を基本とするが、形式のバラエティーや、意味と形式の対応関係は異なる。一方日本語の“～（ら）れる”は「可能性」ではなく「受身」や「自発」と多義をなし、ヴォイスに関わる現象である。本発表は、それぞれの言語が基盤とするモノの「捉え方」の違いが、「能力」「可能性」の多様性に表れていると考え、認知言語学的観点から、日本語、中国語、英語における「能力」「可能性」及びそれらと隣接する概念の捉え方とカテゴリー化の特徴を考察する。

発表者：Chuck Brown（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）

Title : Language ideologies and English learning in Taiwan

Abstract : This presentation will consider English education from a critical perspective. I begin with an introduction to formal English education in Taiwan. Turning to a focus on the visual culture associated with commercial English education in this society, I explore how important ideologies surrounding English education are instantiated in these artifacts. I problematize these ideologies and make explicit connections to concerns among critical applied linguists. These include the following issues: - competition and associated privatization of English education advantaging those with greater resources - inflation of the value of English and a belief in its innocence/neutrality - reliance upon high-stakes testing in the promotion of a gatekeeping role of English - an Inner Circle-centric orientation - the conflation of race with Inner Circle nation-state citizenship and language competency along with the accompanying belief in the sufficiency of such language competency for teaching - a prescriptive language orientation In the conclusion, I argue that such issues should be explicitly foregrounded by English as an International Language (EIL) teachers in their classes and, furthermore, that students should be given the tools to cogently interrogate practices in (English) education on their own. Doing so will not only serve to disrupt undesirable outcomes of English education such as the reproduction of social inequality, but, more broadly, this approach can allow students in East Asia to be more well-adjusted, prideful, and effective English users. Such an approach parallels an overall Freirean liberatory educational philosophy, adapted in this case to EIL education.

発表者：杉江聡子（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院・博士課程）

題目：遠隔交流を活用したブレンド型学習のためのインストラクショナル・デザイン

要旨：社会の情報化とグローバル化に伴い、外国語教育における ICT 活用、アクティブ・ラーニング を導入した学習者中心のインストラクショナル・デザイン (Instructional

Design: ID)、及び教育・学習の質的向上が注目されている。しかし、中国語教育・学習では、ICT を活用した授業の ID に基づく教育・学習実践や学びの経験と成果の質的評価はまだ十分に検討されていない。本研究では、ID の理論と代表的なモデルについて概説し、中国の大学と日本の高校の遠隔交流を活用したブレンド型学習モデルの設計と、異文化間交流を学習活動の核とした授業実践について紹介する。また、評価の一例として、テキストマイニングを採用し、「英語と比較した場合の中国語の位置付け」に関する学習者視点の評価を質的に解釈した結果を示す。

発表者：Cassandra Kawai（北海道大学外国語教育センター）

Title : Creative writing in a second language: A way of thinking, of being, of figuring things out

Abstract : Stories have been transmitted orally from generation to generation regardless of language, culture, or ethnicity. Storytelling is intuitive and an integral part of language development. Letters, journal entries, essays, and poetry have been used in EFL classroom situations to enhance vocabulary and to develop structures and patterns. The tasks are motivating because they allow students to play with the language and to take ownership of the language in a risk-free environment. These tasks; however, do not promote the creative act of self-discovery. Forty-three students at a national university in northern Japan accepted the invitation to be ambitious and to take risks by writing a full-fledged 3000-8000 word short story in English. Students had 14 weeks to utilize their existing knowledge, feelings, memories, and beliefs to create an experience, to create a world, and to wrestle their own language out of a foreign language. Each 90 minute class and 150-500 word assignments explored an aspect of story grammar. In this context, the word story means narrative text and the word grammar means elements: the protagonist, the goal, the problem/conflict, the antagonist, the obstacles, the climax, the theme, the point of view, the dialogue tags, and so forth. The resulting text was then incorporated into the stories. After the final exam, students were asked to voluntarily complete a bilingual survey that examined imagination, self-discovery, self-disclosure, self-expression, and satisfaction. The results of 12 surveys and final exam questions indicated that a single large-scale creative process was as beneficial to hardworking EFL students with limited imaginations as it was for the natural-born storytellers who arrived in the class with well-developed curiosity, active imaginations, and determination to tell a story.

発表者：河合靖（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）・三ツ木真実（北海道文教大学）

Title : Hong Kong and Hokkaido online language exchange program

Abstract : Language exchange is a means of autonomous and reciprocal language learning in which two people speaking different native languages talk or write each other in order to facilitate L2 learning. It is also called tandem learning. Computer

mediated interaction enables language learners to partake in language exchange via online communication. Bilingual online communication helps L2 learners to gain confidence in the target language and to establish self-esteem as a L2 speaker. (Lam, 2004) It also provides bidirectional scaffolding among peers. (Cheng, 2010) Translanguaging (Garcia & Li, 2014) is an approach to the use of plural languages to facilitate co-learning among language learners. A trial run of the Translanguaging Online Presentation Language Exchange (TOPLE) program was offered to students at Hokkaido University, the University of Hong Kong, and the University of Massachusetts Amherst. This program consists of email exchanges, text-based chats, and online presentations. Student feedback indicated an overall satisfaction with email exchange and text-based chats; however, they were less satisfied with online presentations. They also submitted a writing assignment about what they learned through intercultural communication. The assignments were analyzed by Steps Coding and Theorization (SCAT). This method is appropriate for small-scale qualitative studies with a limited amount of data. Results indicated that learners gained self-awareness such as having an insufficient knowledge of their mother language. English learning motivation was improved upon by realizing the characteristic of language as a communication tool and by viewing another foreign language student objectively. Through this practice, learners were able to have meaningful experiences that are specific to intercultural communication. Additionally, it revealed that English learning motivation and attitudes towards intercultural communication were enhanced through a variety of experiences. The result of this study provides important clues to be used in the next cycle of spiral instructional design.

(2) 平成 28 (2016) 年度

- 第 4 回例会：公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」(Multilingual Hong Kong as seen through the eyes of Japanese people) (2016 年 6 月 25 日、香港大学) を開催した。会場は香港大学であったが、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院会場も設定し、Skype を用いて遠隔発表を行った。詳細は以下の通りである。

公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」

日時：2016 年 6 月 25 日 (土) 13 時～16 時

場所：香港大学

発表者：

河合靖・河合剛・山田智久 (北海道大学)・三ツ木真実 (北海道文教大学)「香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習」

飯田真紀 (北海道大学)「広東語と日本語の終助詞について」

小林由子 (北海道大学)「香港におけるポップカルチャーをきっかけとした日本語学習動機

を分析するための理論的枠組み」

横山吉樹 (北海道教育大学) 「香港の中等教育における EMI について: COLT 観察法を用いた分析」

佐野愛子 (北海道文教大学) 「香港在住の日英バイリンガル児童の作文力の発達に関する考察」

杉江聡子 (北海道大学) 「遠隔交流を活用した中国語ブレンド型学習の経験が創出する価値」

今泉智子 (北海道大学) 「出来事を話す際に用いられる「のだ」について」

The poster features a background of various languages including Russian, German, Chinese, Thai, French, Arabic, Greek, Japanese, Swedish, Korean, Spanish, Vietnamese, Hindi, and English. The main title is in large red characters: 公開シンポジウム 日本人から見る 多層言語社会香港. Below the title, the date and time are listed as 日時: 2016年6月25日 13:00~16:00, and the location as 場所: 香港大学 CPD-3.28. A detailed route is provided: (港脚→MTR香港大学駅C1出口で地上へ→昇リエスカレーター →港脚でPokfulam Rdを渡りCentennial Campusへ→つぎのエレベーターで8/Fへ →The Run Run Shaw Towerを左に見ながら中庭を通りThe Jockey Club Towerへ →エレベーターで3階へ→ CPD-3.28). A table of contents is provided in the lower half of the poster.

発 表	
13:00—13:25	「香港の中等教育におけるEMIについて: COLT観察法を用いた分析」 横山吉樹・北海道教育大学
13:25—13:50	「香港在住の日英バイリンガル児童の作文力の発達に関する考察」 佐野愛子・北海道文教大学
14:00—14:20	「香港におけるポップカルチャーをきっかけとした日本語学習動機を分析するための理論的枠組み」 小林 由子・北海道大学
14:20—14:40	「広東語と日本語の総動詞について」 飯田真紀・北海道大学
14:50—15:10	[Skype遠隔発表] 「出来事を話す際に用いられる「のだ」について」 今泉智子・北海道大学大学院
15:10—15:30	[Skype遠隔発表] 「遠隔交流を活用した中国語ブレンド型学習の経験が創出する価値」 杉江聡子・北海道大学大学院
15:40—16:00	「香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習」 河合晴、河合剛、山田智久・北海道大学、三ツ木真実・北海道文教大学

This symposium is sponsored in part by Grants-in-aid for Scientific Research from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS).
"Constructing Plurilingual Communities in East Asia: Implications from Hong Kong."

SCHOOL OF MODERN LANGUAGES AND CULTURES
FACULTY OF ARTS, THE UNIVERSITY OF HONG KONG
Department of Japanese Studies

Co-organizers: Hong Kong Project Joint Research Team:
Japanese Language Programme, Department of Japanese Studies, SMLC, HKU

図2 公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」ポスター

発表者：河合靖，河合剛，山田智久（北海道大学），三ツ木真実（北海道文教大学）

題目：香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習（Online language exchange between students in Hong Kong and in Hokkaido）

要旨：言語交換は、異なる母語話者が互いの言語を学び合う外国語学習法である。本発表では、言語交換学習の理論的な特徴を考察し、香港大学、香港中文大学、北海道大学で行われている遠隔言語交換プログラムを報告する。



発表者：飯田真紀（北海道大学）

題目：広東語と日本語の終助詞について（Sentence-final particles in Cantonese and Japanese）

要旨：本発表は広東語と日本語の終助詞について形式・機能の両面から共通性を指摘し、終助詞が言語横断的に有効な言語カテゴリーであるとの主張を述べ、あわせて終助詞の通言語的な位置づけについて考える。



発表者：小林 由子（北海道大学）

題目：香港におけるポップカルチャーをきっかけとした日本語学習動機を分析するための理論的枠組み（Theoretical framework for analysis of JFL learners' motivation in Hong Kong）

要旨：学習動機を分析するためには、自己決定理論・L2 Motivation Self System・達成動機・時間的展望など、さまざまな理論的枠組みがある。小林（2016）では、香港におけるポップカルチャーをきっかけとした日本語学習者の動機づけには複数の理論にまたがる側面があることが示唆された。本発表では、分析のための枠組みとしてどのような理論が適切であるかを検討する。



発表者：横山吉樹（北海道教育大学）

題目：香港の中等教育における EMI について：COLT 観察法を用いた分析 (An analysis of EMI in Hong Kong middle schools using a COLT Observation Scheme)

要旨：香港では、1900 年、2000 年の教育改革によって、バンド (Band) システムと後期イマージョンが定着してきており、Band 1 校では、英語による授業が、多くの教科で行われている。本発表では、香港の中等教育における英語の授業を観察し、そこで EMI(English-mediated Instruction)がどのように実践されているのかを調査する。授業観察は、コミュニケーションの指向性を把握するために考案された COLT 観察法を用い、その学校がどのバンドに属するのかによって、EMI の特徴に変化があるのかを調べる。結果は、Band によらず、どの学校でも英語の授業は、EMI のみで行われていた。広東語への切り替えや、Mix（広東語と英語の混用）の使用は、ほとんど見られなかった。しかしながら、Band によって、意味と形式の指向性において違いが見られた、Band 1 校では、内容に重きを置く授業が行われていたが、Band 2 や 3 校では、言語形式を中心に教える伝統的な授業が行われていた。



発表者：佐野愛子（北海道文教大学）

題目：香港在住の日英バイリンガル児童の作文力の発達に関する考察 (Biliteracy development of Japanese-English bilinguals growing up in Hong Kong)

要旨：言語的に多様な環境で学童期を過ごす子どもたちがリテラシーの獲得にあたって直面する課題はモノリンガル児童のものとは大きく異なり、両親の母語、滞在年数、母語環境を離れた際の年齢、家庭で使用される言語、二言語の運用能力などが複雑に影響しあうことが指摘されているが、その多くは読解力の発達に関わるもので作文力の発達に関する研究はまだ少ない。また、モノリンガル環境ではないとひとくくりにはできないほど、バイリンガル・マルチリンガルな環境自体も多様化しており、それぞれに特徴的な課題が存在する。本発表では発表者がカナダをフィールドに行った同様の研究で得られた知見と比較しつつ、極めて多様な言語環境下にある香港在住の小学 5 年生 11 名の日英作文を分析し、その発達に関わる要因を探る。



発表者：今泉智子（北海道大学・博士課程）

題目：出来事を話す際に用いられる「のだ」について（On the use of “Noda” when the speaker talks about an episode）（Skypeによる遠隔発表）

要旨：本研究は「先月、新しい車を買ったんです。」のように、話し手が聞き手の知らない出来事を話す際に用いられる文末の「のだ」に注目し、日本語学習者の使用における問題点とその理由を考察する。

発表者：杉江聡子（北海道大学大学院・博士課程）

題目：遠隔交流を活用した中国語ブレンド型学習の経験が創出する価値（The values created by the experiences of Chinese blended learning with distance exchange）（Skypeによる遠隔発表）

要旨：本研究は、第二外国語としての中国語において、語彙・文法学習、eラーニング、日本と中国の遠隔交流の3形態を連携させた循環型IDモデルを開発、実践した。その評価として、交流の記録と学習者視点の評価を対象に、学習の経験、成果及びその価値づけを質的に分析した。



- 第5回例会：国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」（Language Education in the Age of Multi-layered Language Environments）（2017年3月9日、北海道大学学術交流会館）を開催した。(1) 分科会・ラウンドテーブル研究発表、(2) ラウンドテーブル報告会、(3) パネル・ディスカッションの3部構成とした。分科会・研究発表は、日本語・中国語・英語の3言語による個別のテーブル発表会場を設定し、本研究のテーマである多層言語環境を地でゆく分科会となった。ラウンドテーブル報告会は、言語別に代表者が当該の会場で行われた研究発表について総括を報告した。パネル・ディスカッションは、「東アジア多言語主義は現実か幻想か」をテーマとし、香港における新聞・雑誌・オンラインニュース等の多言語化の状況や、台湾における自動翻訳活用の事例と課題について海外からの招待発表者の報告が行われた。日本側からは、インバウンド観光対応のアプローチからの多言語化の課題と展望や、グローバル人材育成をねらいとした外国語教育実践についての報告が行われた。詳細は以下の通りである。

国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」

日時：2017年3月9日（木）10時～17時30分

場所：北海道大学学術交流会館

プログラム：

(1) 分科会・ラウンドテーブル研究発表

発表者：

史宗玲・吳怡萍・黃愛玲・陳玫君（高雄第一科技大学・招待発表）

萬美保・吉川貴子（香港大学・招待発表）

吉村由紀（マサチューセッツ大学アマースト校・招待発表）

河合靖・河合剛・鈴木志のぶ・小林由子・奥聡・飯田真紀・山田智久・林恒立・杉江聡子・

河合カサンドラ（北海道大学）

今泉智子・楊雯淇・謝昀叡・林主恵（北海道大学院生）

横山吉樹（北海道教育大学）

佐野愛子・三ツ木真実（北海道文教大学）

(2) ラウンドテーブル報告会（同時通訳付き）

報告者：

萬美保（香港大学）（日本語会場）

飯田真紀（北海道大学）（中国語会場）

佐野愛子（北海道文教大学）（英語会場）

(3) パネル・ディスカッション（同時通訳付き）

テーマ「東アジア多言語主義は現実か幻想か」

司会：河合 靖（北海道大学）

討論者：

Vivian Kwok（ビビアン・クオック）（ブルームバーグビジネスウィーク中国語版編集
長・招待発表）：The Growth of Chinese Bloomberg Businessweek in Hong Kong
amid Media Downturn

北村倫夫（北海道大学）：「日本のインバウンド対応多言語表記の社会的是非をめぐる
議論の構造と展望」

史宗玲（台湾高雄第一科技大学・招待発表）：Machine-translation-enabled

Multilingualism for Ethnic Diversity in Taiwan Massive Open Online Course

金銀珠（北海道大学）：グローバル人材の育成を目指した大学韓国語教育

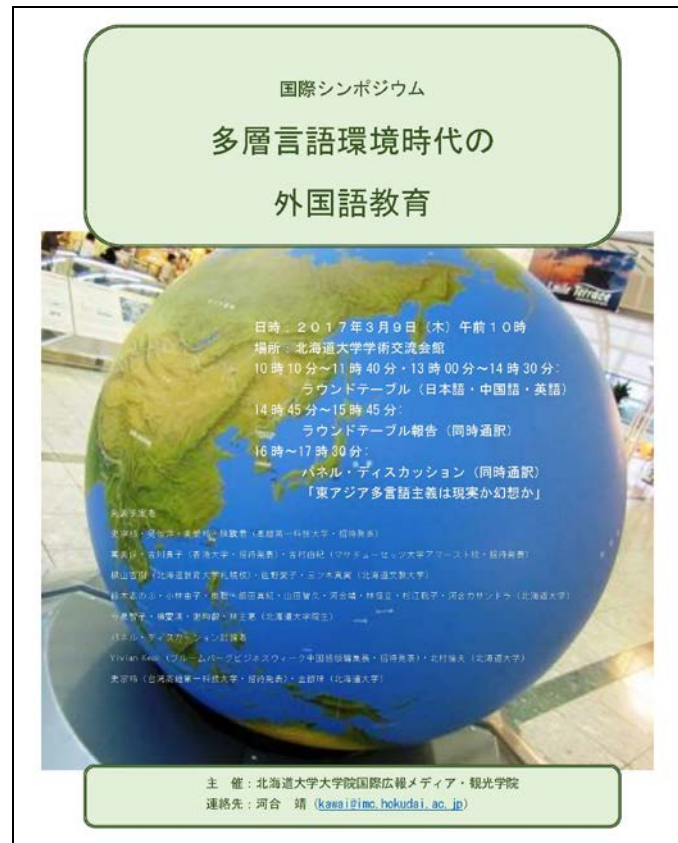


図3 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」ポスター

分科会・研究発表プログラム詳細

日本語テーブル (第4会議室)	中国語テーブル (第3会議室)	英語テーブル (第2会議室)
黄愛玲・陳玫君 (高雄第一科技大学・招待発表) 【台湾】の言語環境と言語政策 ー近 20 年来の動向を中心にー	史宗玲 (高雄第一科技大学・招待発表) 亞洲成人學習者之語言教育 ——「觀光翻譯磨課師課程」之教學問診	吳怡萍 (高雄第一科技大学・招待・発表) Teaching Translation in a Multilingual Educational Environment
横山吉樹 (北海道教育大学札幌校) 香港のバンドシステムにおける EMI の評価と今後の可能性	杉江聡子 (北海道大学) 通过远程交流创造出来的质性价值 —中国学生的观点分析	吉村由紀 (マサチューセッツ大学アマースト校・招待発表) Teaching a Blended Course on Japanese Extensive Reading in the U.S. and Assessment
吉川貴子 (香港大学・招待発表) 香港における日本人子女教育の現状	林主恵 (北海道大学院生) 透過著重於英文搭配詞的線上寫作活動以增進應用字彙	河合カサンドラ (北海道大学) Teaching Creative Writing in English for General Academic Purposes

今泉智子（北海道大学院生） 日本語・英語・中国語の可能 表現—意味地図を用いた多義 関係可視化の試み—		
鈴木志のぶ（北海道大学） 議論構造の日・韓・米対照研 究	飯田真紀（北海道大学） 跨語言視角下粵語句末助 詞的的定位問題--與日語句 末助詞的比較-	奥聡（北海道大学） Arts and Science Courses in English: A Practice Report at Hokkaido University
萬美保（香港大学・招待発表） 教師または大学主導による 学生のための国際体験	楊雯淇（北海道大学院生） 汉语话语标记“怎么说”的 程序意义分析	佐野愛子（北海道文教大学） Educating Deaf Students as Bilinguals: The Cases in Japan and Hong Kong
小林由子（北海道大学） 香港における日本語学習と ポピュラーカルチャーとの 関連—香港における日本の ポピュラーカルチャーは日 本語学習とどう関わるか	林恒立（北海道大学） 「建議老師」與語用失誤	河合靖（北海道大学） Combining Online Language Exchange with Public Speaking
山田智久（北海道大学） 多言語社会における日本人 学生の「グローバル」の捉え 方に関する調査	謝昀叡（北海道大学院生） 華語學習者在面對面及遠 距形式中的溝通策略之考 察研究-以反饋詞為中心-	三ツ木真実（北海道文教大学） Applying Cognitive Linguistics to Learning and Teaching English Prepositions

（3）平成 29（2017）年度

- 第 6 回例会：ワークショップ参加報告会「質的研究と質的データ分析 SCAT の基本を学ぶ」（2017 年 4 月 30 日、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 301 室）を開催した。
- 国際シンポジウム：台湾英語文教学研究国際研討会（5 月 19 日～20 日、台湾・国立高雄第一科技大学）に参加し、研究発表を行った。発表者は、河合靖・小林由子（北海道大学）、佐野愛子・三ツ木真実（北海道文教大学）である。詳細は、「第 4 章 国際会議等の報告」を参照されたい。
- 第 7 回例会：国際シンポジウム「今、そこにある多層言語環境」(A Clear and Present Multi-layered Language Environment)（2017 年 6 月 24 日、北海道大学情報教育館 3 階スタジオ型多目的中講義室）を開催した。（1）研究発表、（2）パネル・ディスカッションの 2 部構成とした。研究発表では、観光、言語教育、社会文化という異なるアプローチから多言語環境をめぐる報告が行われた。パネル・ディスカッションで

は、国際交流と MICE、農業研修、外国人に対する進学指導、SNS を活用した広報等、各産業の側面から言語にまつわる現状や課題についての報告が行われた。詳細は以下の通りである。

国際シンポジウム「今、そこにある多層言語環境」

日時：2017年6月24日（土）9時～18時

場所：北海道大学情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室（北区北17条西8丁目）

プログラム：

(1) 研究発表

1) 移動と交流の研究への言語的アプローチ 10:00～10:30

観光と言語：言語景観（黄愛玲，国立高雄第一科技大学、葛西洋三，静宜大学、発表言語：日本語）

2) 多層言語社会における言語教育 10:30～11:30

香港大学におけるディベートクラスの実践報告（萬美保，香港大学、発表言語：日本語）

香港理工大学副専攻日本語クラスにおける言語教育環境実践報告（松本真澄，香港理工大学、発表言語：日本語）

3) 多層言語環境の形成（同時通訳付き）11:30～12:00

Navigating Language Competence in Japan: Insights from a Filipino Migrant (Reggie, Capacio. Figer、発表言語：英語)

(2) パネル・ディスカッション（同時通訳付き）：北海道の多層言語環境社会と求められる人材 14:00～16:00

司会：河合靖（北海道大学）


登壇者：

望月康広，公益財団法人札幌国際プラザ 企画事業部連携推進課（国際プラザでの MICE 業務の実情及び課題と多言語人材のニーズ）

白崎弘泰，北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士院生（夕張の農業研修生）

宇山小夜，北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士院生 (Roles of Examination Support by a Sapporo NPO for Japanese School Admission for Russian Returnee Students)

頼鈺妃，デイリーインフォメーション北海道（本学院修士修了生）（多層言語社会の観光メディア）



国際シンポジウム

今、そこにある多層言語環境

A Clear and Present Multi-layered Language Environment

日時 6月24日(土)
 会場 北海道大学情報教育館(北17条西8丁目)
 3階スタジオ型多目的中講義室

プログラム
【午前の部】(10:00～12:00)
 1) 移動と交流の研究への言語的アプローチ
 黄愛玲(国立高雄第一科技大学)・葛西洋三(静宜大学)～言語景観
 2) 多層言語社会における言語教育：香港における日本語教育
 萬美保(香港大学)～日本語教育ディベートクラス
 松本真澄(香港理工大学)～副専攻日本語クラス教育実践
 3) 多層言語環境の形成【発表演語＝英語，同時通訳付】
 Reggy Capacio Figer(北海道大学)～フィリッピン人移民の言語的適応
【午後の部】(14:00～16:00)
 パネル・ディスカッション：北海道の多層言語環境社会と求められる人材
 【同時通訳付】
 司会：河合靖(北海道大学)
 登壇者：
 望月康広(公益財団法人札幌国際プラザ企画事業部連携推進課)～国際プラザのMICE業務
 白崎弘泰(国際広報メディア・観光学院博士院生)～夕張の農業研修生
 宇山小夜(国際広報メディア・観光学院博士院生)～ロシア州国子女教育支援【発表演語＝英語】
 頼鉦妃(テレビワカモト北海道，学院修士修了生)～多層言語社会の観光メディア

【連絡先】河合靖(ykawai@imc.hokudai.ac.jp) 予約不要，当日直接ご来場ください。




図4 国際シンポジウム「今、そこにある多層言語環境」ポスター



図5 パネル・ディスカッションの様子

- 第8回例会：国際シンポジウム「移動と交流が創る多層言語社会と市民のまなざし」(Multi-layered Language Society Created by the Mobility and Communication and the Citizens Gaze) (2018年3月9日、北海道大学情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室)を開催した。シンポジウムの目的は、基本的に多様性を重んじる立場で、異文化・多言語のグループが共生するために、できるだけ問題の少ない状態で軟着陸するには何か必要かを検討することであった。そのため、今回は学術研究のみならず、「市民参加」の部分に焦点をあてたパネル・ディスカッションを行い、札幌という街で所謂「外国人」が増加してくる状況に、市民レベルでどのように対応しているか、その現状を当事者の方々の視点で探究した。詳細は以下の通りである。

国際シンポジウム「移動と交流が創る多層言語社会と市民のまなざし (Multi-layered Language Society Created by the Mobility and Communication and the Citizens Gaze)」

日時 2018年3月9日(金) 13時～18時(予定)

会場 北海道大学情報教育館(北区北17条西8丁目)3階スタジオ型多目的中講義室
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/info-j/johokan-map.htm>

プログラム

- (1) 研究発表 13:00～13:30【英語同時通訳付き】
 移民政策と言語：言語政策の失敗？(大友瑠璃子, 北海道大学) + Ricento 教授紹介
- (2) 基調講演【英語同時通訳付き】13:30～14:30(講演50分, 質疑10分)
 Language Policy & Planning: an overview of the field (Thomas Ricento, カナダ・カルガリー大学・招待講演)
- (3) 研究発表 14:40～16:10(3組, 各発表20分, 質疑10分)【英語同時通訳付き】
 “Webbish Writing” in controlled English: Global communication in Web 3.0
 (史宗玲, 高雄科技大学・招待発表, 英語発表)
 Multilingual Translations and Translation Shifts Analysis: A Comparative Study of English and Japanese Retranslations of Tang Poetry
 (呉怡萍, 高雄科技大学・招待発表, 英語発表)
 台湾の言語政策現状と社会認識—語彙「国家言語」を中心に—
 (黄愛玲・陳玫君, 高雄科技大学・招待発表, 日本語発表)
- (4) パネル・ディスカッション 16:40～17:55【英語同時通訳付き】
 テーマ 多層言語社会における諸活動と市民参加(3組, 発表各15分, 討論30分程度)
 司会：河合靖(北海道大学)
 登壇者：
 札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークについて(吉村邦夫, 札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク)
 さっぽろコミュニティ通訳制度について(金子幸恵, 札幌国際プラザ多文化交流部・照井はるみ, 中国語コミュニティ通訳)
 札幌市の医療通訳ボランティアの現状と課題(藏田澄子, 札幌中国語医療通訳グループ)

国際シンポジウム
移動と交流が創る多層言語社会と市民のまなざし
 Multi-layered Language Society Created by the Mobility and Communication and the Citizens Gaze

日時 3月9日(金) 13:00 ~ 18:00
 会場 北海道大学情報教育館(北17西8)
 3階スタジオ型多目的中講義室

プログラム【英語同時通訳付】

1. 研究発表 13:00 ~ 13:30
 移民政策と言語：言語政策の失敗？(大友瑠璃子, 北海道大学)
2. 基調講演 13:30 ~ 14:30
 Immigrants, Language, and Integration into the Canada Labour Market (Thomas Ricento, University of Calgary)
3. 研究発表 14:40 ~ 16:10
 "Webbish Writing" in controlled English: Global communication in Web 3.0 (史宗玲, 高雄科技大学)
 Multilingual Translations and Translation Shifts Analysis: A Comparative Study of English and Japanese Retranslations of Tang Poetry (呉怡萍, 高雄科技大学)
 台湾の言語政策現状と社会認識—語彙「国家言語」を中心に— (黄愛玲・陳政君, 高雄科技大学)
4. パネル・ディスカッション 16:40 ~ 17:55
 テーマ：多層言語社会における諸活動と市民参加
 司会：河合靖(北海道大学)
 登壇者：札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークについて (吉村邦夫, 札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク)
 さっぽろコミュニティ通訳制度について (金子幸恵, 札幌国際プラザ多文化交流部・照井はるみ, 中国語コミュニティ通訳)
 札幌市の医療通訳ボランティアの現状と課題 (藏田澄子, 札幌中国語医療通訳グループ)

【連絡先】 河合靖 (ykawai@irc.hokudai.ac.jp) 予約不要・当日直接ご来場ください。

図6 国際シンポジウム「移動と交流が創る多層言語社会と市民のまなざし」ポスター

【基調講演・要旨／Keynote Speech & Abstract】

Title: Immigrants, Language, and Integration into the Canada Labour Market

Keynote speaker: Thomas Ricento, University of Calgary, Canada

Abstract: Many studies have shown that immigrants' labour market outcomes in Canada have declined over the last several decades, even though their average level of education is higher than that of the Canadian-born population (e.g., Hawthorne 2008). The importance of English and French literacy skills has been identified as having significant direct and indirect influences on labour market outcomes (Ferrer, et al. 2006). Yet, research has also shown that difficulty in getting foreign credentials recognized as meeting Canadian standards is a barrier to labour market integration (Schellenberg and Maheux 2007), irrespective of acceptable scores on the Canadian Language Benchmark tool in an official language. In this presentation, I report the findings from a two-year ethnographic study carried out in Calgary, Canada. In Phase II of this project, 6 families were chosen for an in-depth ethnographic study over a 10 month period which included more than 100 hours of recorded interviews. The findings demonstrate both the tenacity of individuals seeking a new life in Canada, and their

frustrations as ‘foreigners’ whose social capital is not recognized by credentialing authorities and employers. The study also revealed that there is a significant non-alignment between the curriculum of the LINC program, assessment of relevant language competencies, and the actual needs of skilled workers seeking to reestablish their professional careers in Canada.

References:

Ferrer, A., Green, D.A., and Riddell, W.C.. (2006). “The Effect of Literacy on Immigrant Earnings.” *Journal of Human Resources* 41 (2), 380-410.

Hawthorne, L. (2008). “The Impact of Economic Selection Policy on Labour Market Outcomes for Degree-Qualified Migrants in Canada and Australia.” *IRPP Choices* 14 (5), 1-50.

Schellenberg, G., and Maheux, H. (2007). “Immigrants’ Perspectives on Their First Four Years in Canada: Highlights from Three Waves of the Longitudinal Survey of Immigrants to Canada.” Canadian Social Trends. Catalogue no: 11-008-X. Ottawa: Statistics Canada.

【研究発表・要旨／Research Presentation & Abstract】

1. 移民政策と言語：言語政策の失敗？

発表者: 大友瑠璃子 (北海道大学)

e-mail: rotomo@imc.hokudai.ac.jp

要旨: 2006年以降、日本はインドネシア、フィリピン、ベトナムと経済連携協定(Economic Partnership Agreement, EPA)を結び、これらの協定には工業製品・海産物・農産物にかかる関税の撤廃や相手国でのビジネス環境の整備等の他に、看護師・介護福祉士を含む人の移動が含まれている。国によって応募資格や就労前研修などは異なるものの、基本的には、これらの看護・介護従事者は、3～4年の滞在を許可されており、その間、看護師・介護福祉士「候補生」として病院や介護施設で研修・就労しながら、滞在期間終了までに、看護師・介護福祉士国家試験を日本語で受験し、合格を目指すという使命を与えられている。しかし、合格者の数はあまり多いとは言えず、これは、しばしば「EPAの失敗」の証拠として提示されている。

本発表では、実際の介護現場と日本語学習に焦点をあてて、この「EPAの失敗」について考察していく。2013～2016年に行ったフィールド調査のデータを引用しながら、現場での言語使用・学習が、刻一刻と変化する現場のニーズや、地域の雇用状況に応じて変化する施設のビジネス・人材育成環境、利害関係者の雇用関係・人間関係にどう関わっているのか詳説し、「EPAの失敗」に寄与している要素を現場目線から紐解いていく。

2. “Webbish Writing” in controlled English: Global communication in Web 3.0

Speaker: Chung-ling Shih (史宗玲), National Kaohsiung University of Science and Technology

e-mail: clshih@nkfust.edu.tw

Abstract: Advances in information technology, the spread of the internet and globalization made English the lingua franca (EFL) of Web 1.0. Later, multi-modes of computer-mediated communication in Web 2.0 fostered hybrid English as a new EFL by combining English with other languages. Moving into Web 3.0 for information mining and knowledge acquisition without a language barrier, the author proposes a controlled form of English or Webbish to write web texts for gisting through the production of multilingual machine translation (MT) outputs. To demonstrate its effectiveness, an empirical survey was conducted to measure the comprehensibility of the entire MT output based on a 0-100 grading scale. An average score of 89.9 was earned from twelve international participants, showing a very high degree of MT comprehensibility. Meanwhile, the humanistic significance of Webbish writing was probed through theoretical analysis within the framework of postmodernism. Non-standard Webbish writing with its MT service is suited to all global audiences and its fluid meanings are produced under the governance of MT systems, fitting the postmodernist notions of anti-standard, mobility and new identity politics. More than a language reform, Webbish writing suggests acceptance, inclusiveness and equality. It is also an easy way to influence and improve global communication.

Keywords: Webbish Writing, controlled English, machine translation, an MT comprehensibility survey, postmodernist implications

3. Multilingual Translations and Translation Shifts Analysis: A Comparative Study of English and Japanese Retranslations of Tang Poetry

Speaker: Yi-ping Wu (吳怡萍), Department of English, National Kaohsiung University of Science and Technology

e-mail: clshih@ncku.edu.tw

Abstract: The main objective of this research is to identify the translation shifts taking place in multilingual translations. By taking the translation of Tang poetry as an example, this study pays attention to the translation shifts between Chinese source texts and their English and Japanese retranslations. The main objective of this study is to compare how the target texts in different languages vary from each other and add to the meaning of the original. My analysis of the multilingual translations will be based on a linguistically-oriented approach to literary translation as well as five main shifts during the language transfer proposed by Anton Popovič's. What this paper seeks to show is the cultural significance of each re/translation as transmitted in different periods and cultures. The findings can be compared with other translations in different language pairs to gain better understanding of cross-cultural phenomenon of translation.

4. 台湾の言語政策現状と社会認識—語彙「国家言語」を中心に—

発表者：黄愛玲・陳玫君

e-mail: ayling@nkfust.edu.tw , meichun@gm.nkfust.edu.tw

要旨：2017年に発表された「国家言語発展法草案」は、各種族の言語発展を保証し推進するために台湾政府が新たに提出した草案である。しかし、最も重要な語彙「国家言語」の定義が曖昧と言える状況にある。本発表は、政府発表及び台湾国内メディア発表での意味概念をまとめ、更にアンケート調査を用い台湾国内におけるこの「国家言語」の語彙意味概念を考察したものである。

- 第9回例会：研究最終報告会及び情報交換会（2018年3月10日、豊平館）を開催した。3年間の科研プロジェクトによる研究の総括を各自が研究成果発表の形式で報告した。また、今後の研究の方向性や発展の可能性について意見交換を行った。

日時：2018年3月10日（土）9時30分～12時30分

会場：札幌市豊平館 1階「下の広間」

（札幌市中央区中島公園内、地下鉄南北線「中島公園」駅徒歩5分）

<http://www.s-hoheikan.jp/access>

プログラム：

研究発表と最終総括 9：30～12：30（一人20分：発表15分質疑5分）※途中適宜休憩

① 言語とコミュニケーション

広東語の文末助詞 gE2 の意味と意味変化（飯田真紀）

小説の対訳データから見る日本語・英語・中国語可能表現の特徴（今泉智子）

② 施策と学習者

多層言語社会における教育政策と制度について（横山吉樹）

香港における日本語学習と日本のポピュラーカルチャーの関連（小林由子）

複数言語社会香港における継承日本語学習者の多様な言語学習環境（佐野愛子）

香港大学日本語スタンダード策定について（萬美保）

③ 教育と技術

香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習（河合靖、河合剛）

「グローバル」という概念を日本人大学生はどのように捉えているのか（山田智久）

多層言語環境に生きる英語話者とのコミュニケーション（三ツ木真実）

日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究（杉江聡子）



HOME

科研：基礎研究 (B) (一般)「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」
(課題番号15H03221) (平成27年度～平成29年度) (産物HKP48)のWEBサイトへようこそ！

【本研究の概要】(English version of the proposal)

本研究は、理論言語学・応用言語学・教育工学など多面的なアプローチを用いて包括的に多言語社会を考察することで、東アジア圏においてヨーロッパ(型)の複言語主義に基づいた多言語コミュニケーション共同体を創生する可能性と方策を探索することを目的としています。地理的・経済圏的に日本と同じ東アジア圏にある香港をとりあげて、日本とは異なるこの国の多言語使用状況について言語・文化・社会を包括的に考察し、複言語使用社会の実態・実情に関する基礎的知見を得ます。また、香港の第二言語教育者と連携して、複言語主義に沿った二言語併用互恵的外国語必修授業を開発するアクション・リサーチを行います。これら二つの方向のアプローチが相互補完的に作用して、東アジア圏の複言語主義的言語コミュニティの構築に貢献することをめざしています。詳しい研究計画は、[こちらをご覧ください](#)。

【研究組織】

研究代表者

- 河合 詔/KAWAI Yesushi (北海道大学)

研究分担者

- 船田昌紀/IIDA Maki (北海道大学)
- 河合 詔/KAWAI Goh (北海道大学)
- 小林 由子/KOBAYASHI Yoshiko (北海道大学)
- 山田 啓太/YAMADA Tomohisa (北海道大学)
- 渡山 昌博/WAKAYAMA Yoshiki (北海道教育大学札幌校)
- 佐野 愛子/SANO Aiko (北海道文教大学)
- 三ツ木 真実/MITSUKI Makoto (北海道立大学)
- お江 聡子/OGIE Satoko (北海道大学メディア・コミュニケーション研究所)

研究連携協力者

- 高尾 保/YOROZU Miho (香港大学)
- 今泉 繁子/IMAIZUMI Satoko (北海道大学大学院博士課程)



図7 科研WEBサイト <http://translanguaging.sakura.ne.jp/hkp48/>